

こころの援助と研究への姿勢

心理臨床センター副センター長 佐藤 豪

昔、臨床のトレーニングを受け始めた頃、指導してくださった先生の1人に言われたことは、クライアントに対する姿勢を変えてはならないということでした。その時には、「そんなものか」と思っていました。今になってみると、それが重要なことであり、しかもなかなかその姿勢を貫いていくことが難しいということも理解できるようになりました。

例えばカウンセリングでお会いするとき、クライアントさんは様々な生活上の変化を経て、毎回毎回来てくださいます。そしてクライアントと会うカウンセラーの側も仕事上あるいは個人的な様々な変化の中において、カウンセリングの場に臨んでいます。そんな中で少なくともカウンセラーが同じ姿勢を貫くというのはなかなか難しいことだと、実感しています。

今回上梓いたします「心理臨床科学」の第6巻には、研究上の新しい知見が数多く盛り込まれており、まさに新しい知識を作りだし、それを確かなものとしようとする論文の著者達の努力の姿勢がうかがえるのではないかと思います。このように研究としては新しいものを取り入れ、しかし援助する姿勢としては一貫した態度を貫くということが、まさに難しくもあり大切であると思います。そういった意味でこの雑誌の刊行は、われわれ同志社大学大学院の臨床心理学コースに所属する者あるいはその運営に協力して下さる方々にとって意味のあることと考えています。しかし、研究がいつまでも途上であるように、論文としてそれぞれ、これからさらなる向上をめざしてゆくべきものだと思います。

われわれは基本に据えたサイエンティスト・プラクティショナーという考え方を守りながら、心理臨床センターを運営し、また研究を行ってきています。今回この論文集に投稿されました論文もこのような考えをもとに様々な研究の成果を問うものとなっております。心理臨床センターという臨床の実践の場を大切にしながら、科学的な立場から、臨床心理学的な援助を行おうとするわれわれの姿勢は一貫しており、その成果がこの研究誌にも表れていると思います。

今回のこの研究誌に発表されました成果について忌憚のないご意見をいただければと思います。また、われわれの対人援助というスタンスに御理解をいただき、まだまだ未熟なわれわれですが、今後ともどうぞ温かい目でご支援を賜ればと思っております。